

ロート製薬株式会社

このロート製薬株式会社は、
事業の中心を大阪府生野町に
置き、その発展と共に、
生野町の発展に貢献する
ことを目指しています。
「ロートレー」の生野町
大阪本社を語ります。

生野で働く人にとって理想郷となる
「ロートユートピア」から
こだわりの製品を世の中に送り出す

創業者の山田安民氏は、
「生野の地は高にありて、確信を得、
かき回りの生野町を築き上げた」と、
この生野の日本に必要だと考えた。

信天堂山田安民氏は、
周腸薬の「用法」を
改良した。

日露戦争終結後に
「トラネーム」という
病気が流行し、
目薬の需要が高まった。この
目薬「ロート目薬」を生産した。

もともと、目薬は本体容器と点眼器の2つに分かれていた。
これを一体型に改良したと考へ、1931(昭和6)年には、
世の中になかった「滴下式両口点眼瓶」
という容器で発売。
目薬業界に大革命を起こした。



110カ国以上で展開する世界的企業 躍進の地である生野へのこだわり

ロート製薬と言えば、胃腸薬や目薬などの商品を思い浮かべるが、実は多彩な事業を展開している製薬会社である。胃薬や目薬などの医薬品、メンソレータム、肌ラボなどのスキンケア、妊娠や排卵日などの検査薬を開発する「ヘルス&ビューティー事業」。農業や飲食事業に加え、ヘリオホワイトやセノビックなどサプリメント&飲料を製造する「食事業」。最先端医療とも言える幹細胞を利用した「再生医療事業」などだ。さらに110を超える国に拠点を置き、まさにグローバルカンパニーとして活躍している。そのような名高い企業が、今なお生野区に本社を構えているのには理由がある。

同社は、1899（明治32）年に山田安民さんが信天堂山田安民薬房を創業し、胃腸薬の製造販売から始まった。1949（昭和24）年にはロート製薬株式会社を設立し、2019（令和元）年に創業120年を迎えた長い歴史を持つ。

生野区に現本社と工場を構えたのは、1959（昭和34）年のこと。この本社事業所は「ロートユトピア」という理念を掲げ、広大な敷地の中に芝生広場やポートを浮かべた池までも作り、従業員にとって理想郷と呼べる事業場に作りあげた。

「ロートユトピア」は単なる環境整備ということではなく、「ものづくりは人づくりから始まる」という考え方のもと、そこで働く人に対する愛が根本にある。そして、その愛は従業員だけでなく、地元である生野区にも向けられている。生野という場所こそ原点であり、この地で大きく成長することができたことへの感謝を製品作りにも活かしている。地元の方に愛され、誇りに思ってもらえる会社でありたい。地元の方に喜んでもらえる製品を提供したい。それが結果的に、大阪、さらに日本全国、そして世界の人々に貢献できることになると考えているからだ。

生野区の大阪工場では、同社の中でも特に、手間ひまをかけるべきこだわり製品を製造している。そのひとつが、2001（平成13）年に機能性化粧品先駆けとして発売された「Obagi（オバジ）」だ。その代表格である美容液「Obagi C」を進化させ、毛穴からハリまであらゆる悩みをケアする「Obagi C25 セラム」を構想15年かけて開発。すでにメイク雑誌などで高い評価を受け、美容業界の話題をさらっている。

日本でいち早く妊娠検査薬を発売し、検査薬の時代を切り開いてきた「ドゥーテストhCG」や子どもを望む女性の悩みに寄り添った排卵日予測検査薬のトップブランド「ドゥーテストLH」も、大阪工場で作っている。

このように思いのつまった画期的な製品を作り、事業やサービスを提供している同社。そこに共通するのは、人の悩みや願いに真摯に向き合っているということだ。製品を必要とするお客様を大切に、従業員の働き方や健康を気遣い、地元である生野区に貢献したいという思い。そのような人への愛が、世のため人のためにつながっているのだろう。

ロート製薬株式会社

<https://www.rohto.co.jp>
〒544-8666 大阪市生野区巽西1-8-1
TEL 06-6758-1231

事業内容／医薬品・化粧品・機能性表示食品などの製造販売

お母さんから赤ちゃんにしてあげられる最初の思いやりは、いち早く妊娠に気付いてあげることだと思います。妊娠に気が付かないまま知らず知らずのうちに薬を飲んで、お酒を飲んで、タバコの煙を吸っていたなど、赤ちゃんの発育に影響することから少しでも早く守ってあげられるからです。

その一助になりたいというのが、妊娠検査薬発売のきっかけです。

妊娠を希望する 声に耳を傾け 検査薬を開発

セルフで妊娠検査することの必要性をなかなか理解してもらえなかった中で、全国津々浦々地道な啓蒙活動のもとに、徐々に認知されるようになりました。その後、ドゥーテストの専用窓口に、農家に嫁いだという北海道の女性から「まわりから跡継ぎを望まれているが二人目ができない。私に何か問題があるのでしょうか」と涙ながらの電話をいただいたことがきっかけとなり、妊娠検査薬だけでなく、「授かるサポート」も必要だと考え、排卵日予測検査薬の開発に着手。一時は薬事法改正により、店頭陳列も広告もできずお客様に届けづらい時期もありましたが、ロートが行政と地道にやり取りを続けた結果、2016年末に規制緩和を実現！一般用医薬品として認められ、多くのお客様に届けることができました。今は働く女性も妊活する夫婦も増えているので、これからも「授かるサポート」を誰よりも考え、様々な新しい提案を考えていきたいと思っています。

2018年には社員による「生野区を元気にプロジェクト＝いっぴき」を発足。今回の4人も「いっぴき」のメンバーです。

弊社は、お客様の声に即した研究、開発、工場、品質管理と一貫したもののづくりが特徴です。製造スタッフには、品質向上に向けた生産現場の改善活動が重要です。社内に「改鮮隊」が発足したのは、2005（平成17）年です。

これは、究極の QCD（Quality: 品質、Cost: コスト、Delivery: 納期の略）を目指し、生産現場の改善活動を維持・継続するためのチームです。改善ではなく、「改鮮」としたのは、改善と新鮮を組み合わせ、「いつでも新鮮な気持ちで改善に向き合っていこう」という思いが込められています。現場からは年1000件の改善案が寄せられますが、小さな気づきも大切にしています。5S（整理・整頓・清掃・清潔・しつけ）活動は、品質向上と生産効率につながっています。弊社の製品は、デリケートな悩みに応えたり、症状をやわらげたいと思う方のためであるので、人の手によって、すべての製品の検査を行っています。すべては品質向上のため。今日やっていることが、明日も当たり前だと思ふことなく、それを常に言い聞かせて、日々の業務に取り組んでいます。

ものづくりはひとづくり、
人の成長を一番に
考えています。

大阪工場 改鮮隊
北村 浩康さん

人の知恵、工夫を凝集した
その人へはより続けよう。

プロダクトマーケティング部
樗木 真帆さん

さし心地に こだわった 目薬の開発を追求

世のためになる 新しい製品を 生み出したい

社会への思いだけでなく、社員や仲間に対する愛、地元に対する愛も強い。愛にあふれた社風があってこそ、本当に世の中に必要とされる製品を提供できると自負しています。

製品開発部
安藤 達也さん

弊社が検査薬を製造しているというイメージはないかもしれませんが、実は、検査薬のパイオニアでもあるんです。妊娠検査薬、排卵日予測検査薬という2つの画期的な製品を他社に先駆けて開発したのは弊社です。これらの製品は今までにない機能という点を訴求し、子どもを授かりたい、命の大切さを知ってほしいという想いから生まれた製品なのです。さらに言えば、命を授かることにつながる製品は、何ものにも代えがたい大きな価値や意義を持っていると思っています。みなさんの悩みに対して真摯に向き合っています。

思うような結果が得られなければ、治療に踏み切ってほしい。次のステップへと進むための判断材料にしてほしいという思いがあります。私たちは、単なる「もの」として製品を販売しているのではなく、社会に貢献できるもの、人の役に立つものを提供しています。一例ですが、エクシブ（女性の水虫薬）、フレディCC（腫カンジダ薬）、和漢漢（漢方薬）などがあります。そして、今

までにないものを作るという想いも、今なお持ち続けています。社会への思いだけでなく、社員や仲間に対する愛、地元に対する愛も強い。愛にあふれた社風があってこそ、本当に世の中に必要とされる製品を提供できると自負しています。

取締役
プロダクトマーケティング部長
カ石 正子さん

小学6年生の時に目薬を買いに行くと、薬剤師の方からロートの目薬がいいと猛アピールされ実際に買って使ってみたら気持ちがいいし、確かにいい目薬だと実感。でも何が良いのか本当に解ったのはロート製薬に入社後のことです。どの製品にもいろいろな方の思いや、こだわりが詰まっていることを知り、あらためて感動しました。医療用と違って一般用目薬は確かな効果はもちろんのこと、さしやすさが大切。なのでノズルはフリーアングル。縦でもナナメでも、どの角度でも一定の液量を落とせるよう、容器やノズルに工夫しています。配合成分も何百回と繰り返し微調整を行って、少しでもお客様が刺激を感じず、気持ちいいさし心地になるように目指しています。他社との違いは、圧倒的な「さし心地」と確かなエビデンスに基づいた効果へのこだわり。花粉症のかゆみ、ドライアイも増加している中、もっと使いやすくなる目薬を作りたいです。

我が社の 自慢

本社の敷地内に 50mプールが！

1964（昭和39）年の東京オリンピックで日本の競泳が不振だったため、2代目社長の山田輝郎さんが私財1億円を投じて、翌年、本社敷地内に50mプールを作り、全国から強化選手を招集。水中カメラなど最新の科学を練習に活用し、1972（昭和47）年のミュンヘンオリンピックでは、金メダリストを輩出。過去には夏に地元の方にもプールを開放し、多くの方に利用いただきました。